

館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 9 月 15 日(月)

発行 館長 加藤 智 一

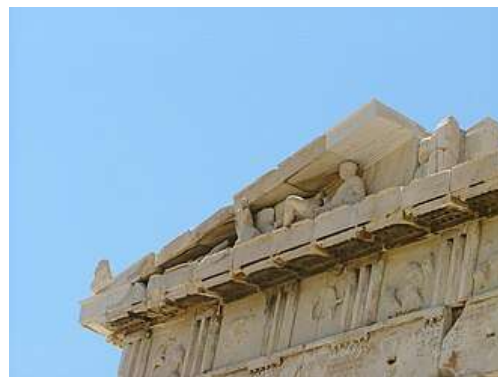
穀様し（ごくだめし）

山形市の鳥海月山両所宮では毎年 9 月、「穀様し（ごくだめし）」と言って、来年の作物の豊凶を土と神に問う神事が行われます。どのような神事かというと、境内の地中に、炊いた米、稲穂、粟穂、ナス、キュウリ、インゲンの 6 種類をそれぞれ山形、庄内、米沢、仙台、秋田の 5 地域を象徴する穴に分けて埋めます。そして翌年、腐敗具合を確認し、10 段階で評価。形が保たれていれば豊作、腐敗が進んでいれば不作とされるというものです。この神事は、江戸時代から続く作占いで、地域の農業と信仰が結びついた象徴的な行事となっています。さて今年の結果、つまり来年の様子はというと、残念な事に「今までに見たことのない悪い結果」と出ました。これはしたり。「もしかしたら、地球温暖化の影響なのだろうか」などと、占いのレベルを超えて、科学的根拠の探究に興味が湧いてきました。

すると、にわか調べで、たいした根拠も無いのですが、まんざら温暖化と関係が無いわけでもないらしく、微生物の代謝は、温度に強く依存しており、気温が高くなると、地中の腐敗菌（分解菌）や微生物の活動は一般的に活発になるそうです。具体的には、多くの腐敗菌が 20～40℃の範囲で最も活発に増殖し、夏場の地中温度がこの範囲に達すると、分解速度が加速するとか。すると、菌類が分泌する分解酵素（セルラーゼ、プロテアーゼなど）の活性も高まり、結果的に有機物の分解が速く進むということらしいです。そうしてみると、この行事は、気候変動や地域の農業の未来を占うだけでなく、科学的な側面から見ても、興味深い意味を持っていると言えます。顕微鏡が無かった時代、腐敗が微生物の働きによるものだということが分かっていたなかった時代から、なんとなく人間は肌で、第三者の介入を感じていたのだと言うことを想像できる事例ではないでしょうか。



ギリシャ神話「オイディプス王」の物語



2025. 9. 15 朝日新聞「天声人語」では、ギリシャ神話で有名な一節、ソフォクレスの悲劇「オイディプス王」の物語が取り上げられておりました。この物語に登場する「スフィンクス」は、単なる怪物ではありません。「知恵の試練」を象徴する存在なのです。「スフィンクス」はテーバイの郊外、ピーキオン山に現れ、通行人に謎かけをしては、答えられない者を食い殺していました。都市は恐怖と混乱に包まれ、誰もこの怪物を退けることができずにいました。「スフィンクス」の有名な謎かけはこうです。「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足—これは何か?」。「オイディプス」はこれに「人間」と答えます。赤ん坊の頃は四つん這い、大人になると二足歩行、老いると杖を使うからです。この答えに「スフィンクス」は驚き、自ら命を絶ちます。「スフィンクス」を倒したことで、「オイディプス」はテーバイの英雄となり、王位を与えられ、王妃「イオカステ」と結婚します。つまり、「スフィンクス」は「オイディプス」が王となる「通過儀礼」のような存在でもあった訳です。そして「スフィンクス」の謎かけを解く知性こそが、「オイディプス」の悲劇を加速させることになりました。彼は自らの出生の謎をも解き明かし、なんと結果として父を殺し母と結婚していたという真実に辿り着くのです（現代ではありえない、ぶっ飛んだ設定）。「スフィンクス」の謎かけは、物語全体の「知られざる真実」と「知ることの代償」を象徴しているとも言えます。「スフィンクス」は単なる怪物ではありません、「オイディプス」の知性と運命を試す「門番」のような存在でした。彼女を乗り越えることで英雄となった「オイディプス」は、やがて自らの内なる謎に直面し、悲劇へと導かれていくのですが、この構造は、ギリシャ悲劇の深い哲学性を象徴する部分でもあります。